

新人だって頑張ってるんです。

会員 陳 裕真



「弁護士」という肩書だけで「先生」と呼ばれるようになって早1年、果たして私のことを本当に先生と思ってくれるクライアントはどれだけいるのだろうか。

1 クライアントから 仕事の依頼をされるということ

法的なトラブルを抱えた人が、弁護士という肩書を持った見ず知らずの人間に対し、決して安くはない報酬を支払って、自分の問題の解決を依頼する。実に変である。業務に追われれば追われるほど、その事実を見過ごしてしまいがちだが、我々の日常は、その都度、局地的に非常に大きな責任をもたらしているのである。

2 責任という言葉

「責任を取る。」という言葉は日常的に使用される。では、「責任を取る。」とは具体的にどういうことなのだろうか。

スポーツ中継などで、「○○選手は、自分のミスを自分で取り返しましたね」なんていう解説をよく耳にする。○○選手のように、自分の犯した失敗によって生じた結果をチャラにすることが「責任を取る。」ということなのだろうか。

私は、それは違うと考えている。経営学の世界では「責任」を「accountability (説明責任)」と訳すように、金融商品取引法が、損失補填を禁止して、むしろ契約締結前交付書面の充実を図っているように、「責任を取る。」というのは、自分の行動をしっかりと説明することができることをいうのではないだろうか。○○選手は、ミスを取り返したことなく、ミスをしたときさえも全力でプレーしていたからこそ、試合に出場しているメンバーとしての責任を果たしたといえるのである。

3 麻雀という遊び

最近はめっきり機会が減ってしまったが、私は非常に麻雀が好きである（すごく弱いのだが…）。大学生のころは、友人の友人などとも打つ機会が多くあり、友人に呼ばれるたびにポコポコにされていたものである（私は麻雀がすごく弱いのである…）。そんな麻雀を愛するものの、麻雀にはいまいち愛されていない私が必然的に身に着けたスキルが、「同卓した人が強いかどうかを見極める能力」である。極端な話、私は、相手が着席した瞬間にその人がどの程度強いのか分かるのである。

なぜ、打つ前からその人の強さが分かるのか。それは、麻雀が強い人ほど自分に自信を持って麻雀を打っているからである。初めて戦う相手を前に、全く物怖じすることなく自分の麻雀を打てる人間は、こぞって自分に自信があるのである。

これは法律相談でも全く同じだろう。新人弁護士は、自らの知識にない質問をされれば、慌てふためくしかない。しかし、読者の諸先輩方は、自らの知識にない質問に対してもドーンと構えて回答するはずである。この違いは、まさに法曹としての自分に自信があるかの違いなのである。クライアントから見て、自信がなさそうな新人弁護士とドーンと構えているベテラン弁護士、どちらが頼りがいのある弁護士に見えるかは論を待たない。

クライアントから信頼されるために、法曹としての自分に自信をつけるためには、自分の行動すべてについて説明責任を果たすことのできるよう日々の業務に取り組むほかないのである。ファイナンスロイヤーとしての道は長く、そして険しい。